

Re*al*AL

2015.1 Vol.24

NIKAKAI ASSOCIATION OF PHOTOGRAPHERS



ことのほか花を愛でる国でタナカーを塗って

大石芳野

東南アジアの国々を旅して楽しいことのひとつは、日本に自生していない美しい花々を見られることだ。たとえば蘭の花は、南国ならではの有名な花だ。到着した空港ロビーで、早速に花々の出迎えを受ける。蘭ばかりか、樹木に咲く花も魅力的だ。香りが心地よい黄色いパタウパン（日本の桜のように愛されている）、白いセイロンテツポ、ジャスマミン・・・などなど、季節ごとに街や村を彩る。信心深い人びとが、お釈迦様や神様への供養に花々をささげると同時に、女性たちは自分にも花を飾る。

たとえばミャンマー（ビルマ）では、生花を少しだけアレンジした品のよい髪飾りのアウンサンスーチーさんを写真や映像などでよく見かける。苦難が多かるうに、彼女の微笑みは人びとに安泰の気持ちと勇気を与えるようなパワーもオーラもある。その彼女も70歳を過ぎた。それでも政界で孤軍奮闘している姿に、私

たちも励まされる思いだ。

アウンサンスーチーさんの国の呼び方は、外国人にとつて微妙なものがある。どう呼ぶかで、その人のスタンスが分ることが多い。「ビルマ」は、イギリス植民地時代の国名だ。アジア太平洋戦争で日本軍は、イギリス軍などの連合軍にビルマ戦線で大敗した。そして「ミャンマー」、これもまた軍の暴力による国名。1988年に大勢の市民が軍の銃弾に倒れ、酷い恐怖政治が続いた。

日本語では別の国のように違う印象がある二つの国名だけれど、彼らにとつては同じことだという。たとえば、日本を「ニッポン」「ニホン」、それがジャパンになったくらいの違いらしい。母語では、今でも「ミャンマー」「バマー」と話す。英語発音になって「バーマ」、それが日本語化して「ビルマ」になった。

民主化を弾圧した軍事政権が「ミャンマー」という呼び方を世界に強要した。

日本はすぐに従ったが、軍事政権に長く監禁されていたアウンサンスーチーさんは「ビルマと呼んでください」と言つて抵抗の意志を示した。以来、私は「ビルマ」と言い続けていた。けれど、彼女が解放されて国会議員になってからは、私も「ミャンマー」と呼ぶことにためらいがなくなった。むしろ「ビルマ」には植民地という屈辱感も潜む。国名ひとつをとつても、その国の歴史が伝わってくる。

歴史に翻弄されたこの国の人たちが、ことのほか花を愛でるのは、鬱々としてうな自分の気持ちを少しでも晴れやかにしたい、その願いからかもしれない。町の小さな市場でも、売る人も買う人も女性たちは髪を生花で飾っておしゃれを楽しむ。しかもよく似合う。その姿を見る男性たちも嬉しいはずだ。そう思いながらヤンゴン（ラングーン）の遠距離バス停に向かった。そこには日影をつくるよ



イギリス植民地時代から変わらないデザインの馬車が、今でも住民の足代わりに常用されている。ロンジー（腰巻）姿で行き交う女性たちの顔には、白粉のタナカーが見られる。メミョー（ピン・ウー・ルウィン）にて。撮影／大石芳野



雪の晴間

朝倉隆文（会友）

「生活感のある冬の風景」をテーマに30年余。雪が降ると、モノクロ作品を頭の中でイメージし、写真撮影を最優先に能登や高山、新潟まで足を延ばして、美しく雪化粧された風景の中にある人々の生活を探し求め、走りまわっています。

掲載作品は、富山県射水市（旧新湊）の内川というところです。過去に諸先輩によって多くの作品が発表されている場所、私には、写真を始めたばかりの頃にご指導いただいた近藤龍夫先生が素晴らしい作品を撮られた、思い入れのある場所でもあります。毎年、冬になると内川に撮影に赴いています。行く度に、いろんな表情を見せてくれる撮影ポイントです。今回もいつもの橋の上でカメラを構えていると、偶然、カモメが飛んで来ました。その幸運のワンカットです。

自然相手の作品づくりでは、粘り強くチャンスを待つしかないのですが、ときに神様が微笑んでくれるのを期待して、心に残る作品づくりに励んでまいりたいと思います。

うに何本もの樹木がさまざまな花を咲かせている。バスを待つ人たち、菓子や果物などを売る人たちでかなりの混雑だ。

バスで北の方へ約700キロ、マンダレーを経由して、かつてイギリス人がつくったリゾートの町、メモヨー（ピン・ウー・ルウィン）へ行った。多民族国家ならではの、この地域にはシャン族が多い。あちらこちらにイギリスの影響が垣間見られる。百年前の建物なども随所に残り、昔ながらのデザインの馬車が、今も住民の足になっている。言葉も文化も他とは違うらしいが、私には区別がつかない。それでも滞在するうちにシャン族ならではの穏やかさに和まされていた。

この国ならではの生活文化と言えるひとつに、女性たちはロンジー（腰巻）を纏（まと）って、顔に白粉を塗る習慣が



大石芳野（おおいし・よしの）

● 写真家。東京生まれ。日本写真家協会会員、日本大学客員教授。フォトジャーナリズムの第一線で活躍。世界各地で取材した戦禍や困難な状況で生きる人々、そして大地に生きる人々などをドキュメンタリー写真で伝えている。

写真集は『夜と霧は今』『沖縄に生きる』『HIROSHIMA半世紀の肖像』『小さな草に』『沖縄 若夏の記憶』『カンボジア苦界転生』『ベトナム凜と』『生命の木〜アジアの人びとと自然』『アフガニスタン戦禍を生きぬく』『コソボ 破壊の果てに』『子ども 戦世のなかで』『それでも笑みを』『福島 FUKUSHIMA 土と生きる』など多数がある。

写真展は「コソボ 明日へ」「平和への思い」「戦禍 子ども」「眼差しの向こうにあるもの」ほか多数。受賞は「芸術選奨（文部大臣新人賞）」「児童福祉文化賞（大賞）」「土門拳賞」「紫綬褒章」「JCJ賞」ほか多数。

ある。近隣の国々でも見かけるが、ミャンマーでは街でも村でも、大人も子どもも白粉を塗っている人が多い。伝統的なお化粧で、タナカーと言って木の皮を擦って粉にし、水に溶かしてペースト状にして塗る。日焼け止めにも効果があるから、朝方、田畑や市場に出かける人たちも、登校する子どもたちも、夕刻に水浴びをした人たちも、タナカーで肌を整える。塗ると冷やりとして気持ちがいいので、私も常用者になって日本にまで持ち帰ったほどだった。

さらに独自の文化といえば、映画にもなった『ビルマの豎琴』で日本でも知られている、サウン・ガウという16弦の琴がある。心に滲みわたるような音色で、静かな曲によく似合う。聴いているうちに、私の心にも微笑みが広がっていくよ

うだ。人びとの平和を愛する穏やかな気持ちを込めることのできる楽器として、サウン・ガウは今でもよく奏でられる。

安寧を願いながらも、急速な近代化によって人びとは翻弄され、変貌しつつある。金持ちがさらに金持ちになる政策によって一部の富裕層は優遇され、貧富の格差はますます広がっている。そうした状況はミャンマーという発展途上国ばかりのことではなく、私たちにとっても決して他人ごとではない。

花の旅は、その道のベテラン写真家が多く、私は足元にも及ばない。それでも花に魅せられながら、その地で生きる人たちの文化や暮らしぶり、考え方など多くを教えられた。蓄積されたことを大切にしながら、新たな気持ちで、また彼の地への旅に出たいと思っている。



夏景色

米倉保幸（会友）

JR 駅で日本最南端の指宿枕崎線「西大山駅」を出発する列車、手前にヒマワリ畑を入れて撮影した一枚です。

日の出直後の朝日につつまれた色調で情感を表現するため、午前5時44分発の一番列車を撮影しました。

右上の山は薩摩富士とも呼ばれる開聞岳（かいもんだけ）です。この山から北北東約20キロに、旧陸軍航空隊知覧基地がありました。当時、特攻隊の出撃拠点の一つで、飛び立った特攻隊員が見たであろう本土最後の山です。私自身は、戦争体験はないのですが、体験談や戦争の痕跡に接することが多い土地柄のためなのか、夏になると心理的に晴々とした気持ちになれず、むしろ鈍い痛みを感じることもあります。光が強い季節だから、より影を意識するのもかもしれません。

終戦から70年の節目を迎えるこの夏、果たしてどんな景色を見ることができでしょうか。無念に散った先人たちに報いるためにも、平和で穏やかな夏景色であってほしいと願います。

女瞳私

おんなどうし

福田幸子（会員）

この写真は、女性と花をカラーージュしたものです。

タイトルの「女瞳私」には、私の永年のテーマでもある、私が瞳（カメラ）を通して女性を撮るという意味があり、女性の美しさと強さ、不可思議さ等々を表現したいと取り組んで来ました。

東京デザインスクールで2年間学び、卒業後は杉木直也先生、藤井秀樹先生、小川勝久先生と、最高の師に恵まれて学んでまいりました。

かつて多重露光、アートエマルジョンでのモノクローム表現など、それなりに苦労して創っていた写真も、今ではデジタルの普及で自由に表現の中も広がっております。

未だに納得できる作品はつくれておりませんが、今後も一生の課題として、楽しみながら勉強してゆきたいと思っております。

（左ページ）



厳冬に生きる 母と子

青山昌弘（会員）

年間でもっとも寒い3月初旬、流氷に乗って南下したタテゴトアザラシが、カナダ・セントローレンス湾の中央部付近で一斉に出産し、子育てを始めます。

赤ちゃんアザラシが待つ流氷は、マドレーヌ島からヘリコプターで30分から1時間ほど飛行した海域です。気温マイナス20〜30度Cの氷上で生まれた赤ちゃんは、カロリー豊富なミルクを飲んで1日2キロずつ体重を増やし、わずか2週間ほどで親離れして北極海へ向かいます。

掲載作品の撮影は、小雪が舞う寒い日でした。母親は、昼間は海中で過ごすことが多く、親子の姿が見られるのは珍しいこと。生後4〜5日の赤ちゃんが、母親に寄り添ってのんびりしていました。私が姿勢を低くして近寄っても逃げることなく、とても可愛い表情を見せてくれました。寒さを忘れて感動しながら撮った一コマです。今後も心に残る作品づくりを目指したいと思っています。

共に生きる

山本 茂（会友）

私が生まれて間もなく、1匹の子犬が貰われて来ました。雑種だが真っ白で毛並みのよいメス犬でした。私は、この犬と成長を共にしました。

ある日、小学校から家に帰ると、母親が泣きながら庭の隅に穴を掘っていました。私は愛犬の死を知りました。

そして現在、わが家には8歳になるオスの柴犬がいます。私の退職と二人の子供が独立したことを契機に飼いはじめました。妻と二人だけの生活に、新たな会話が生まれました。

柴犬の寿命は14年から17年ほどと聞きます。私自身の余命とほぼ一緒なのだろうと思います。犬と共に成長して、犬と共に晩年を過ごす。偶然の結果でしょうが、人生は面白い。

掲載作品は、よく行く撮影地でご同輩の老人と老犬を見かけ、その光景に自分を重ねて撮影したものです。静かに歩みを進める老人と犬、迷惑ならぬように1回だけシャッターを押しました。



カワセミの四季 「威嚇」

齊藤憲司（会員）

カワセミは魚獲りの名ハンターです。外敵も非常に多く、柳の木が茂っている場所に身を隠しながら生息しています。体型はスズメより大型で尾は短く、口ばしは鋭くて長大です。体の上面は暗緑青色、背腰は美しい空色で「空飛ぶ宝石」とも称され、水中の小魚を獲るのが得意技です。巣は崖に60センチほどの横穴を掘って作ります。自然のテリトリーの中でパートナーを見つけてペアリング（結婚）をします。

北国の短い春、JR旭川駅から車で20分ほどのところにある江丹別川のカワセミたちは、まずパートナーを見つけることから始まります。オスがメスに魚をプレゼント（求愛給餌）して、ペアリングと巣作りをします。やがて雛の誕生と巣立ちがあり、冬を迎える前に、それぞれが旅立ちをして行くのです。

私はカワセミの四季を20年以上観察しながら撮影させていただいております。

親子・愛情

若城章良（会友）

動物園の関係者の努力でオラウータンに子供が誕生し、地元はもとより遠方からもカメラマンが大挙して押し寄せて、連日、まるで撮影会のように盛況で、レゾの放列ができていました。

私も単車で約15分の動物園に通いました。弁当持参で、毎日のように朝から獣舎の前に座り込んで、オラウータンとのニラメッコ状態が続きました。

そして何カ月か通っているうちに、母親のウーコが私を認めてくれて、遊び仲間に入れてくれるようになったのです。それからは、オラウータン親子と楽しい日々を過ごすことができました。

掲載作品は、その時期の一枚で、今も懐かしいくらいと思ひ出されます。

病と医療の知識

健康で明るく人生を楽しむために③

医学博士 吉田鉄也 (会友・兵庫支部)

加齢による運動器機能障害の予防

日本人の平均寿命は、平成25年に男性が80・1歳、女性は86・1歳となりました。男性は世界4位、女性はなんと1位です。

日本人の平均寿命の推移は、第1回生命表の明治33年では男性37・9歳、女性32・9歳でした。その後、大正から昭和初期にかけては男女ともに40歳代で推移している。昭和22年に男性50・06歳、女性53・96歳となり、初めて男女とも50歳

を越えました。それでも65歳以上の高齢者数は415万人で、人口の約5%に過ぎませんでした。それが平成26年9月には3296万人となり、総人口の26%になっています。

●加齢による運動器疾患

このように高齢者の増加に伴って高血圧や高脂血症、糖尿病、心臓病なども増えてきていますが、これらは生活習慣病です。高血圧や高脂血症は、これらは生活習慣病です。高血圧や高脂血症は、これらは生活習慣病です。高血圧や高脂血症は、これらは生活習慣病です。

わが国では、運動器疾患による65歳以上の有訴者率は「腰痛」が男女ともに1位で、「手足の関節の痛み」は男性が7位、女性は2位になっている。寿命が延びても疼痛による苦痛、あるいは社会負担の増加にならないためにも、慢性疼痛を改善することが求められます。

●運動器障害による「ロコモ」

歩行や立ち座りなど、移動に関する機能が低下する状態を「ロコモティブシンドローム」と呼んでいます。日本語で運

動器症候群と言います。骨、関節、筋肉そして神経などが関連しあっている現象で、最近ではテレビや新聞でもよく見聞きする言葉です。

病気やケガなどが原因で身体のパランス能力や筋肉が衰え、膝や腰が痛むために「よくつまずく」「ゆっくりしか歩けない」など、足腰が弱くなったと感じたら「ロコモ」の始まりと言えます。

①骨粗しょう症⇨骨密度が低下して骨がもろくなり、骨折しやすくなる。
②変形性関節症⇨膝関節や股関節、腰関節の軟骨がすり減って痛みが現われる。
③脊柱管狭窄症⇨神経が圧迫され、手足のシビレが現れる。

- ・ ですが、以下は自宅でできる「ロコモチェック」です。
- ・ 片足立ちで靴下がはけない。
- ・ 家の中でつまずいたり滑ったりする。
- ・ 階段を上がるのに手すりが必要。
- ・ 横断歩道を青信号で渡りきれない。
- ・ 15分以上は続けて歩けない。
- ・ 2kg程度の重い物が持ち帰り困難。
- ・ 家の中の力仕事に困難。

日常生活でこのような項目に当てはまる人は、整形外科医による正しい診断を受けることをお勧めします。

信仰の旗 鬼界榮次 (会友)

2012年の6月、再度訪れたネパール。カトマンズ郊外のボダナートで目にした異様な光景。空間を埋めた色とりどりの旗に魅せられ、シャッターを押しました。後でわかったことですが、この布には経文が書かれていて、信者にとっては信仰の証であり、布が風になびく度に読経したことになるらしい。その合理的な考え方に、いたく感心しました。

ここはヒンドゥー教ではなく、チベット仏教の聖地です。高さ36メートルの仏塔がある寺院で、塔頭から八方に五色の祈禱旗が飾られています。無数の旗が塔壁と商店街の間に吊されていて、多くの信者の信仰を集めていることがひと目でわかりました。

インドに近い国々、ネパールやバングラデシュ、チベットには古い宗教行事が多くあります。神々への信仰心は深く、真剣そのものです。

今後も祭りや祈りの行事、そして明るい無垢な子供たちも撮り続けてゆきたいと思っています。

●適切な運動「ロコトレ」

私たちの骨や筋肉は、毎日、新陳代謝を繰り返して少しずつ造りかわっています。そのため、健康な状態を保つためには、毎日できるだけ体を動かすようにして、身体に適度な負荷をかけることが必要です。膝や腰が痛いからと動かさないと、身体機能がますます低下します。年齢や重症度など個人の状態に合わせて、適切な運動量「ロコモトレニング」と内服薬を専門医に処方してもらいましょう。

普段、撮影などによく出かける人は、それほど重い症状はないと思いますが、写真撮影は大変な労力を要します。将来「ロコモ」にならないよう、日頃からウォーキングや水泳など運動を続けることが肝心です。ただし、翌日に痛みや疲労が残らない程度に、無理をせずに継続するようにしましょう。運動に出られない場合は、室内でテレビ体操やラジオ体操でも結構です。いつまでも撮影に出て写真を楽しむためにも、ぜひ「ロコトレ」を実行してください。

もう歳だからと諦めずに、毎日の生活の中で上手に身体を使い、健康を維持することが大切です。これからも人生の主役はあなた自身です。



日本
新名所
ガイド

【東京駅】

写真・文 須賀 一（会員）

古くて新しい駅舎に復元

東京駅丸の内駅舎は、2007年4月から5年半をかけて大規模な改修工事が行われ、装いも新たに東京の新名所として蘇りました。

そして東京駅は、2014年12月20日に開業100周年を迎えました。

東京駅の建設工事は1908年（明治41年）に着工し、開業したのが1914年（大正3年）のこと。それから100年、日本を代表するターミナルステーションとして、近年ますますその機能と役割の重要性が増しています。

建設当時の丸の内駅舎は、鉄筋レンガ造り3階建てで、南北にドーム屋根を置いた豪華華麗な洋式建築でした。が、太平洋戦争の東京大空襲で炎上、屋根の部分が焼け落ちて3階部分は鉄骨だけになってしまいました。終戦の翌年から再建が始まりましたが、復旧工事で3階建てだった建物は2階建てになり、南北のドーム屋根は三角屋根に変更されました。

今回の復元工事では、創建時の姿に戻すことを基本に設計デザインし、外観はもとより内観の細部に至るまで可能な限り忠実に復元され、古くて新しい駅舎に

生まれかわりました。駅舎のシンボルである南北のドーム内部も、芸術品と言えるほどの美しい装いを見せています。

【東京駅の撮影メモ】

今回の取材で東京駅を訪れたのは昨年の12月中旬。この12月で開業100周年とあって、テレビなど各メディアで取り上げられて話題になり、普段の数倍の人出でどこも混み合っていました。各ビルは趣向を凝らした大きなクリスマスツリーで飾られて、若者や家族づれで大賑わい。そのため撮影の規制もあり、思うに任せない撮影となっていました。

近年、東京駅一帯の再開発が進み、周囲のビルが次々に建て替えられ、東京駅は高層ビルの谷間にあります。周囲のビルから見下ろすか、あるいは地上から見上げるか、どちらも写真になります。

朝から夜まで光線が変化し、様々な表情を見せてくれます。一日のうちでもっともドラマチックなのは、周囲のビルに明かりが灯る夕暮れから夜にかけての間帯です。まだ光の残る青い空をバックに、ライトアップされた赤レンガ駅舎が、いっそう鮮やかに浮き上がり、ビル群の光とともに幻想的な世界が楽しめます。

<写真上> 太陽が沈んで夕闇が訪れるころ、ライトアップされた赤レンガ駅舎と明かりの灯ったビル群が、濃いブルーの空をバックに浮かび上がった。もっとも幻想的な時間帯である。

<写真下> 駅舎の南北にドーム屋根が復元され、創建当時の華麗な姿を取り戻した。

<左ページ> 創建当時の姿に復元された南北ドーム内部は、丸の内駅舎でもっとも魅力的な必見ポイント。天井の8つの角に配された「稲穂をもつ鷲」のレリーフをはじめ十二支のレリーフなどが、独特な雰囲気醸し出している。



第100回記念二科展

「記念事業」「四部コラボ展示」について

(公社)二科会・生方純一 常務理事

川内 悟 常務理事

吉野 毅 常務理事 (第100回記念二科展記念事業実行委員長)

塙 珠世 評議員 (事務局長)

出席者

(二社)二科会デザイン部・堀川佳英 業務理事 (二科展四部コラボ実行委員長)

(二社)二科会写真部・角尾栄治 理事 (第100回記念二科展記念事業参加実行委員長)

片岡順一 会員 (事務局長)

天内紀元 会員 (出納役)

片岡：本日はご多忙のところご出席いただきありがとうございます。2015年の二科展は第100回という大きな節目の展覧会ですが、「記念事業」「四部コラボ展示」などが企画され、すでに実行委員会によって準備がスタートしております。特に「四部コラボ展示」は二科会4部の会員が作品参加して展示構成をするという点で参加者を募っています。写真部会員がコラボ展示に対して理解を深めて、より多くの参加者が得られるように、展示内容についてのイメージなどお話ししていただけたらと思います。

第100回記念展の「記念事業」

生方：お陰さまで二科展は2015年第100回になり、「第100回記念二科展」として開催します。先人たちの努力でここに到達できたことに特別な感慨ボレーションになるような気がします。毎年チャリティーでご協力をいただきますが、その時に思わぬ面白い作品が出てきますので、デザイン部と写真部から、びつくりするようなものが出品されるんじゃないかと期待するわけです。

堀川：最初は、本当にできるのかとか、いろいろと心配する声はありました。ただ、4部の会員の方々がいつもの展覧会で発表するような作品をコラボしても、それは斬新な展示にはなりにくい。で、生方先生から「遊び」という大きなテーマでやったらという提案をいただきました。これはテーマとしてとても素晴らしい。ただ「遊び」はちよつと広すぎるので、何か具体的なサブテーマを作ったら

があります。この伝統を受け継いで二科展をいっそう発展させてゆきたいと考えております。そのためには二科会4部の協力が不可欠で、第100回記念展では4部が参加する企画展をやるということになりました。

吉野：実行委員会は、諸般の事情を考慮し、手作りの100回展をやろうというのが基本的な考え方です。記念事業として、国立新美術館で「第100回記念二科展」、東京都美術館、大阪市立美術館、石橋美術館(福岡)で「伝説の洋画家たち—二科100年展」を開催します。

この展覧会は、二科会、産経新聞社、各美術館の共同主催です。概要が粗方決まり、約100人の洋画家、彫刻家の作品が展示されることになっています。美術の教科書などで見ていた絵もたくさんあり、日本洋画史そのものです。内容のあたりは自由ということですね。

堀川：私は展覧会場の記録撮影で毎年4部の作品を見て回っているんですが、4部とも猫の作品が意外と多いんです。

角尾：確かに写真でも猫はけっこう被写体になっていますね。

堀川：私が一番最初イメージしたのは、100人の会員が参加した「100人の猫100匹」というか、100点の猫作品が集まったら凄いいと思います。

角尾：猫の写真は100点や200点すぐ集まると思います。

天内：「ネコ100態」の作品サイズとかは決まっていますか。

堀川：サイズとかは、まったく制限ありませんが、写真の場合は自分でプリントできるサイズでいいと思いますし、ペーパーにプリントした作品でなくてもいいわけです。たとえば「ネコ100態」をタブレットに入れて映像で見せるという方法も、全然アリだと思います。

塙：遊び心で、たとえば猫の写真をTシャツにプリントするとか、マグカップにする、絵ですと川から手ごるな石を拾ってきて猫の顔を描くとか、コラボ展示ならではの作品づくりが楽しみです。

堀川：立体物に絵を描くことで、彫刻と絵がコラボということになります。立体物が展示できるような展示方法も考えます。これはコラボ展示という展示そのものを見せることにもなりますので、集まった作品を雑然と置いても、単にごちゃ



<出席者> 左から片岡順一、塙 珠世、生方純一、堀川佳英、吉野 毅、川内 悟、角尾栄治、天内紀元の各氏

る展覧会になると思います。

川内：これは大いに期待していただいていますね。

吉野：それと国立新美術館の「第100回記念二科展」の1階に特別展示室を設けて、主に戦後二科の牽引者の作品を展示します。スペースは少ないですが、写真部、デザイン部にも協力をしていただくことになっています。

「四部コラボ展示」を企画

生方：もう一つは「四部コラボ展示」ですね。すでに4部の会員全員に「コラボ展示参加のお願い」と「参加申込書」を発送し、参加者を募っています。これは有志による共同展示になります。

堀川：まず4部会議で、特別展示室を設けてデザイン部と写真部も参加するという話がありました。それとは別に、二科会4部の会員が一緒になって作品を作ったらどうかという提案をしたんです。それは面白いんじゃないですかと、皆さんから賛同していただきました。それが4部のコラボレーションとか、インスタレーションのような形で展示してみたらどうだろうという話になったわけです。

塙：二科会4部の相互交流がより深まるという意味からも、ぜひやりましょうということですね。

吉野：コラボ展示のスペースは、国立新美術館2階の休憩室で4室あります。私は、このコラボ展示は100回記念だけで終わらせるのではなく、翌年以降も継続することに意義があると思うんですね。回を重ねることで少しずつ進化するんだ

ごちゃするだけです。で、デザインの展示構成ということですね。

角尾：コラボ展示については、大体わかりました。

堀川：吉野先生がおっしゃったように、次年度も継続ということになれば、次は犬でもいいわけで、「101匹ワンちゃん」ですね。今回は猫ということ、気楽に参加していただきたいです。

まずは多数のエントリーを期待

角尾：現時点で会員からの参加申し込みはあるんですか。

塙：申込書がファックスでも送られてきています。彫刻部はまだ発送したばかりですが、絵画部、デザイン部、写真部からのエントリーはあります。特に写真部さんは凄く関心が高くて燃えていますね。

堀川：「こんな画期的な企画ができるなんて凄い」とか、「写真部だけでやるのだったら遠慮したいが、4部でやるんだったらぜひ参加したい」「二科展の質を下げたしまうことになったら申し訳ないので、とにかく遊びということを楽しみにしています」といった言葉が添えられていて、ほんと写真部凄いいと思います。

角尾：それはありがたいです。会員の皆さんが積極的に参加してくれることを期待したいですね。とにかく4部と一緒に楽しむことに意味があると思います。

塙：写真部の会員で、猫を撮られている先生だと思えますが、猫の写真集を送ってくださいました。写真部の先生方は力がこもっていますね。

吉野：101回展からは1階の休憩室も

ろうと思います。だから1回目で完成した形にする必要はないと思います。

塙：絵画部・彫刻部・デザイン部・写真部の壁を取り払った、ある意味、実験的な展示になりますね。

堀川：一般的なコラボ展は、たとえばデザイン部の会員と写真部の会員と一緒に共同で作品を作る、これがコラボ作品ですが、それも含めて個人参加の作品を同じテーマで展示するという発想なんですね。ただ今回は、コラボ作品を作ろうということではなくて、コラボ展示なんです。個人・グループが、まったく自由な発想で参加していただきたいです。

生方：絵画部だから写真部だからとか、そういう枠にとらわれない発想です。絵画部は油絵で描くとか、写真部は写真を撮るとかではなく、好きな方法で好きな作品を作るんですね。写真家が絵を描いても全然かまわない。

堀川：たとえば写真を印画紙で見せるだけでなく、立体に加工して見せることもできますね。今、3Dプリンタとソフトを使って立体を作れることもできます。

吉野：彫刻をスキヤニングして、3Dでプリントアウトできちゃう時代ですね。

テーマは「遊び」と「ネコ100態」

堀川：コラボ展示のメインテーマは「遊び」なので、自由に遊んで作品を制作してもらおうということです。

川内：個人参加される方が、かなり多いんじゃないかと思うんですが、彫刻とか絵画とか、それぞれのジャンルを超えて挑戦していただけたら、何か面白いコラボ

使用できるようになると思いますので、野外展示会場ともつながり、会員の皆さんのイメージも拡がるのではないのでしょうか。

角尾：コラボ展示そのものが、なかなかイメージできないという人も多いと思いますが、一度経験することで、きっと面白くなると思います。

生方：ある程度の具体性がないと、コラボと言われてもイメージがはっきりしないので、具体的にこんな作品を作ろうというの必要ですね。

堀川：それから、今回は展示スペースが限られていて、多数が参加された場合、あるいは全員の作品が展示できないのではと懸念されることも考えられますが、そこは工夫して全員参加の形にしたいと思っています。できるだけ多くの4部会員に参加していただきたいと思えます。

堀川：作品の良い悪いは関係ありませんから、まずはエントリーして、コラボを楽しんでもらいたいと思います。

吉野：1回目の「四部コラボ展示」は、結果を気にしないで、まずやってみようということですね。多くの会員の皆さんに関心をもってもらえたらと思います。

二科会には4部あるので国立新美術館全室を使って展覧会ができるわけです。やはり4部が協力して、独自性のある二科展という芸術を発信する場を形成することが大事ですね。そして多くの来場者に楽しんでいただける、夢のある公募展になつていかなければと思います。

片岡：本日はいろいろとお話しいただきありがとうございます。

2015第63回二科会写真部展 公募規約

NEWS FILE

支部展情報

- 宮崎支部展
会期：1月26日(月)～2月1日(日)
会場：宮日会館パピルスギャラリー
- 第51回山口支部公募展
会期：1月30日(金)～2月1日(日)
会場：光市文化センター
- 会期：2月6日(金)～8日(日)
会場：宇部市文化会館
- 会期：2月13日(金)～15日(日)
会場：山口市小郡文化資料館
- 青森支部展
会期：2月5日(木)～8日(日)
会場：八戸ポータルミュージアムはっち
- 第47回神奈川支部公募展
会期：4月16日(木)～20日(月)
会場：みなとみらいギャラリー
- 第7回大分支部写真展
会期：4月21日(火)～26日(日)
会場：大分市・アートプラザ ギャラリーA
- 第24回茨城支部公募展
会期：5月22日(金)～27日(水)
会場：茨城県立県民文化センター
- 第42回静岡支部公募展
会期：6月2日(火)～7日(日)
会場：静岡県立美術館 県民ギャラリー1
- 第27回山梨支部展
会期：6月9日(火)～14日(日)
会場：山梨県立美術館 県民ギャラリーC
会期：6月21日(日)～7月12日(日)
会場：富士河口湖町・ギャラリー1富士
- 支部公募展作品募集
- 第24回茨城支部公募展
応募資格：茨城県在住者または関係する

写真愛好家

- ◇テーマ：自由(単写真)、未発表に限る
- ◇サイズ：四ツ切またはA4判
- ◇応募受付：3月1日(日)～7日(土)
- ◇応募料：1点1千円
- ◇応募方法問合せ先：村松義一茨城支部長
☎029・821・2990
- ◇賞：茨城二科賞、茨城新聞社賞、茨城県知事賞ほか
- 特別会員・会員・会友・支部員情報
- 浜口タカシ特別会員の作品が「パリ・フォト」展に展示
フランス・パリのグラン・パレで2014年11月13日から4日間、ヨーロッパ最大の国際写真フェア「パリ・フォト」が開催され、浜口タカシ特別会員の大学紛争の作品5点が展示された。多くの来場者があり、展示作品に興味深く見入っていた。(文・西村建子会員)
- 浜口タカシ写真展
「Student Radicals Japan 1968-1969」
フランス・パリのタカ・イシイギャラリー
フォトグラフィパリーで、浜口タカシ特別会員の個展が開催(2014年12月4日～1月24日)された。
- 菅田芳文写真展「オランダの風」
静岡支部・菅田芳文支部員の個展
会期：1月4日(日)～2月1日(日)
会場：静岡市・珈琲工房すがの
- 長井泰彦写真展
「郷・紀行(湖国での出会い)」
滋賀支部・長井泰彦支部員の個展
会期：1月21日(水)～2月22日(日)
会場：近江八幡市・ギャラリー1淡海座
- 松永愛子写真展「Paris & Praha」
静岡支部・松永愛子支部員の個展
会期：2月20日(金)～3月3日(火)

映像・大竹省二、音楽・團伊玖磨で1961年に制作された幻のフィルム「シンフォニー・ジャパン」が半世紀を経て初のテレビ放映 (BSジャパン)

2014年12月29日(月)にBSジャパンの年末特別番組「シンフォニー・ジャパン 1961～2015」が、午後9時から約2時間放送された。

1961年にイタリアの国際テレビ映画祭で金賞をとった「シンフォニー・ジャパン」は、陸奥陽之助がプロデュースして、外務省が海外に日本を紹介する目的で制作した、当時では珍しい音楽と映像のみで構成された映画。

映像は写真家・大竹省二、音楽は作曲家・團伊玖磨によるもので、水をテーマにした自然や成長する産業の活力などを象徴的にとらえた映像美と調和した音楽によって、美しくも力強い日本の姿が鮮やかに表現された作品。

この映画は、国内では一般公開されず幻のフィルムとなっていたが、2013年に映画会社の倉庫で発見され、デジタル処理によって53年ぶりに復元されて今回、BSジャパンで本邦初公開となった。



「シンフォニー・ジャパン 1961～2015」の放送画面より

- 会場：静岡市・ギャラリーえざき
- おおいし和子写真展「くぐらり〜露地裏通り」
兵庫支部・おおいし和子会友の個展
会期：3月25日(水)～30日(月)
- 会場：静岡市・しずぎんギャラリー四季
- 国分多恵子写真展「ふるさとの旅」
神奈川支部・国分多恵子支部員の個展
会期：3月31日(火)～4月6日(月)
- 会場：みなとみらいギャラリーC
- 高倉百合子写真展「魅せられて」
広島支部・高倉百合子会友の個展。

- 会期：4月1日(水)～2016年2月29日(月)
- 会場：安芸高田市立八千代の丘美術館
- 市川恵美写真展「日目の木」
静岡支部・市川恵美支部員の個展
会期：4月9日(木)～15日(水)
- 会場：大阪ニコンサロン
- 伊藤一生写真展「動物園と水族館の仲間達」
愛知支部・伊藤一生会友の個展
会期：9月29日(火)～10月13日(火)
- 会場：HCLフォトギャラリー名古屋

●「第63回二科会写真部展」に作品応募される場合は必ず「公募規約」をご請求ください。

【応募要項(概要)】

■募集部門

- ◎A 単写真部門
- ◎B 組写真部門

※単写真部門と組写真部門への同時応募も可。

■応募資格

18歳以上に限る(アマ、プロ、国籍は問わない)

■テーマ 自由

■応募点数 制限なし

■応募形態

◎A 単写真部門=1枚写真に限る

◎B 組写真部門=3枚組みの組写真に限る

※両部門ともに四ツ切・A4判のカラーおよびモノクロプリントに限る。銀塩写真/デジタル写真のいずれも可。電子メディア(CD-Rなど)は不可。

■応募受付期間

2015年3月1日(日)～3月7日(土)(消印有効)

■応募方法

◎単写真=プリント裏面に規定の「応募カード」を貼付し「応募票」を同封して送付

◎組写真=プリントの裏面1枚ごとに規定の「応募カード」を貼付し、1組3枚をタテに繋ぎ合わせ、「応募票」を同封して送付

※郵便、宅配便で送付のこと(直接持参は不可)。

■応募料

◎A 単写真部門=1点につき2,000円

◎B 組写真部門=3枚1組につき5,000円

※応募料は専用の「払込取扱票」に金額など所定事項を記入し、3月7日までに郵便局で払込みのこと。

■送付先

〒106-0031 東京都港区西麻布1-4-20-601

二科会写真部「第63回展」係

TEL: 03-3470-8033

■審査

◎一次審査=4月中旬(入選内定作品を選出)

◎二次審査=6月中旬(展示用大伸ばしパネル貼りで審査して入賞・入選作品を決定)

※入選作品は両部門とも1人1点とする。

◎審査員=一般社団法人二科会写真部 特別会員・会員

■審査結果発表

審査結果は6月末に応募者全員に直接通知。

入賞・入選の公式発表は7月15日(水)に行う。

■賞

◎二科賞(賞状・賞金50万円)

◎全国知事会賞(賞状・賞品)

◎日本カメラ財団賞(賞状・賞品)

◎協賛会社賞(賞状・賞品)

◎奨励賞(賞状・副賞)

■作品展示

◎会期=9月2日(水)～14日(月)

◎会場=国立新美術館(東京・六本木)

■展示料

◎A 単写真部門=13,000円

◎B 組写真部門=23,000円

【応募規定(概要)】

①応募作品は応募者本人が撮影した写真で、未発表作品あるいは発表予定のないものに限る(類似作品および二重応募と判断した場合は、入選決定後でも入選を取り消す)。

②応募プリントはフチ付きにし、台紙などには貼らないこと。

③応募作品は希望者にのみ返却する(有料)。

●「公募規約」請求先

二科会写真部「第63回展」係

〒106-0031 東京都港区西麻布1-4-20-601

FAX: 03-3470-8034

E-MAIL: info@nika-shashin.or.jp

http://www.nika-shashin.or.jp

※FAX、Eメール、葉書

でご請求ください。

二科会写真部のホーム

ページからもダウンロ

ードできます。



第63回展 公募ポスター

INFORMATION



■2015年度行事予定

- ◎2015年度春期定時委員会友総会（出席者は特別会員・会員・会友）
2月24日（火）／東京プリンスホテル
- ◎会員・会友・支部長等連絡会議（出席者は特別会員・会員・会友・支部長・副支部長・事務部担当）
2月24日（火）／東京プリンスホテル
- ◎懇親会（出席者は特別会員・会員・会友・支部長・副支部長・事務部担当）
2月24日（火）／東京プリンスホテル
- ◎第63回展一般公募の応募作品受付
3月1日（日）～7日（土）の7日間
- ◎第63回展特別会員・会員・会友の作品受付
3月9日（月）～10日（火）の2日間
- ◎第100回記念二科展（＝第63回写真部展）
9月2日（水）～14日（月）／国立新美術館
- ◎2015年度夏期定時委員会友総会（出席者は特別会員・会員・会友）
9月4日（金）／東京プリンスホテル
- ◎第63回二科会写真部展授賞式・懇親会（出席者は来賓・特別会員・会員・会友・入賞者・入選者および同伴者）
9月4日（金）／東京プリンスホテル

- 2015年度特別会員認定者1名
（2015年1月1日付）
金山正夫特別会員（富山）

■『第62回展二科会写真部作品集』

2014年度「第62回二科会写真部展」に展示した総1,409作品をオールカラーで収録した貴重な作品集。巻末に入賞者受賞感想、第1回展から第62回展までの入賞者・会員会友推挙者一覧、創立会員・特別会員・会員・会友・入賞者・入選者の作品目録などを掲載。



『第62回展二科会写真部作品集』

■表紙のことは

「海辺の昼下がり」大竹省二 創立会員

カリブ海が広がるメキシコ湾の海辺。ヤシの木の間を乾いた風が通り抜けて行く。昼下がりの明るい光につつまれて、時間がゆっくり流れていた。女がひとり、そんな解放感を楽しんでいるかのように、いつまでも静かな海を眺めていた。

並製本・サイズA4判変形(297×225ミリ)・カラー388ページ・本文52ページ。
頒布価格15,000円。特別会員・会員・会友・支部員・第62回展入賞者および入選者は特別価格13,000円。支部員以外の第62回展応募者は14,000円(いずれも送料実費)。
※購入希望者は、所定の申込書を事務局にご請求ください。

■「遠野市民俗芸能撮影会」の作品募集！

東北地区6支部（青森支部・岩手支部・秋田支部・山形支部・宮城支部・福島支部）主催による岩手県遠野市の撮影会作品を募集します。冬の「遠野ふるさと村」で、伝統ある郷土芸能や曲り家などを捉えた自信作を応募してください。

【募集要項】

- 募集対象：「遠野市民俗芸能撮影会」の参加者に限る。
- 募集作品：2015年1月17日（土）に開催した東北地区撮影会での作品に限る。「鹿踊り」「神楽」「かやぶきの民家」など。
- 応募作品：カラー及びモノクロのプリントA4判～四ツ切・単写真（未発表作品）に限る。撮影会で配布した応募票に所定事項を記入の上、作品裏面に貼付。
- 応募点数：1人10点以内
- 応募締切：2015年4月1日（水）消印有効

【応募規定】

- 応募料：無料
- 審査：大竹省二創立会員
- 優秀賞：10名以内（優秀作品は『REAL』に掲載）。
- 発表：広報誌『REAL』25号に掲載。
入賞者のみ本人に直接通知、ホームページに掲載。
- 作品返却：応募プリントは返却しない。
- 応募方法：郵送
- 応募先：（一社）二科会写真部「東北撮影会コンテスト」係
〒106-0031 東京都港区西麻布1-4-20-601
- 問合せ先：同上（TEL：03-3470-8033）
- 主催：一般社団法人二科会写真部

■第99回二科展（＝第62回写真部展） 地方巡回展スケジュール

- 福岡展：2015年2月17日（火）～22日（日）
福岡市美術館
- 鹿児島展：2015年3月4日（水）～15日（日）
鹿児島県歴史資料センター黎明館
※会場によって展示スペースが異なるため、全ての作品が展示されない場合もあります。
富山展、名古屋展、大阪展、京都展、広島展は終了しました。

■特別会員・会員・会友情報

- 島村安彦会員（和歌山）2014年9月27日逝去
- 小林勲会員（福岡）2014年9月30日自主退会
- 森公夫会友（千葉）2014年9月30日自主退会
- 中村順一会友（福岡）2014年11月8日逝去
- 阿部浩一会友（兵庫）2014年11月16日逝去
- 内藤和男会員（神奈川）2014年12月5日逝去
- 西原富久会員（広島）2014年12月30日自主退会
- 重田治之会員（広島）2014年12月31日自主退会
- 中森勉会員（三重）2014年12月31日自主退会
- 相川美知子会友（京都）2014年12月31日自主退会
- 藤原樫岫会友（大阪）2014年12月31日自主退会
- 竹内正男会友（京都）2014年12月31日自主退会

■「支部員バッジ」を頒布します

二科会写真部では、会員・会友および支部員それぞれにバッジを発行。支部員バッジが必要な場合は支部長を通して本部事務局へお申し込みください。 ●頒布価格＝1個2,000円



二科会写真部広報誌「REAL」Vol.24
2015年1月27日発行
発行所 / 一般社団法人二科会写真部
発行人 / 大竹省二
編集 / 一般社団法人二科会写真部
〒106-0031 東京都港区西麻布1-4-20
ワルトハイム西麻布601
TEL. 03-3470-8033 FAX. 03-3470-8034
<http://www.nika-shashin.or.jp>